海尊・清悦以後

――長寿伝承の行方――

野村純一

一

常陸坊海尊の素姓は判らない。ただし『義経記』巻四で、判官は武蔵坊弁慶に向っては「御辺は比叡の山育ちの者」と言い、続いて海尊については「常陸坊は近江のみづ海にて、小舟にこそ調練し」と述べている。弁慶、海尊の二人はこれからしても、きわめて対蹠的な出自であったのが知られる。したがって、両者はもともとそれぞれが際立って質の異なった伝承母体を背景に登場してきた人物であったのであろう。

しかし、それはそれとして『義経記』での二人は「一人は武蔵坊、一人は常陸坊」と称される程であった。義経の彼等に寄せる信頼はすこぶる篤く、事実これを裏書きするかのように北国落ちに際しては「判官殿の御供には、武蔵坊、片岡、伊勢三郎、常陸坊、これを始めとして七人」といった在りようであった。しかるにそれにも拘わらず、常陸坊海尊はその後、最も決定的な場面において突然主君と己が同傍を裏切る。『義経記』巻八「衣河合戦の事」はこれについて次のように記している。

常陸坊を初として残り十一人の者ども、今朝より近きあたりの山寺を拝みに出でけるが、その儘帰らずして失せにけり。言ふばかりなき事どもなり。

と。そして、これはまた『義経物語』でも然程変らない。そこでは

ひたちばうをはじめとして、十一人はけさきんごくの山でらおがみに出たりけるが、はうぐわんの御ことはたのみがたふやおもひけん、やがてかへらずうせにけり

と。『義経記』は一切の事情を酌酌せずに、ただひとこと「言ふばかりなき事どもなり」と突き放している。比較して『義経物語』は一条「はうぐわんの御ことはたのみがたふやおもひけん」といって、幾分情状を慮った言辞を差し挟み、その上で「やがてかへらずうせにけり」としている。ニュアンスに相違はみられるものの、そうかといってどちらも海尊に向ける怨嗟、怨恨の情に変わりはない。ましてや、彼等の行動を容認、許容するといった態ではまったくなかった。

余程言い難い理由があったのかも知れない。それにしても、常陸坊海尊は大事の場に臨んで、何故突如として姿を消してしまったのであろうか。解し難いことである。たとえ理由は何処にあれ、具体

的なそこでの陳述、あるいは釈明の無い限り、このままでは一向に釈然としない。それがためにその日の彼等の行動からは、敵前逃亡、戦線離脱といった印象がいまなおすこぶる強い。結局はそう言わざるを得ないのである。

そしてこの印象は『義経記』ならずとも、一層動かし難いものとして人々の中に深く沈潜し、ついで汎く受け継がれて行く趨勢にあった。早くこの間の事情を述べたのは柳田國男翁である。『山の人生』『東北文学の研究』での論説がそうであった。すなわち海尊は時を経て、あるときは清悦と同一人と見做され、あるときは名を秋風道人、または残夢とも謂って流竄、落魄の身を人々の前に現わし、その上でひとしきり遠き日の戦さ語りを披露して歩いたというのである。たとえばそれと共に彼の終焉の地を伝える『東磐井郡誌』の「清悦墳」は、次のように記されている。

門崎村に在り高さ三尺周圍六尺許後人雨屋を修し雨露を覆ふ參詣するもの藜の杖を納めて長壽を祈ると云ふ清悦は源義經の臣にして東行に從ひ來り平泉没落に際し此地に寓して歿す時寛永七年其年壽四百六十餘といひ傳へたり實に奇怪の事なり平泉没落即ち義經の自害は文治五年なり是より寛永七年まで五百三十七年なり假りに清悦年二十にして難を竄れたりとするも五百五十年餘なり（本文四百六十餘といへるは訝し）清悦が義經の戰闘の樣を物語りせしを劍術の門人小野太左衛門なる者が筆記せるを清悦物語として俗間に傳ふ鎌倉雜記に義經の雜色に喜三太なるもの名を清悦といへり蓋是ならんか

鹽松勝概云巖截（はぎり）（陸前國宮城郡留守氏故墟岩切也）西北二里有青麻祠山頂峻絶緣鐵鎖攀登祀海尊俗一名清悦源判官從者常言壽三百歳好説判官遺事事頗怪異其稱青麻不知何故

之に依て見れば清悦は喜三太に非ずして常陸坊海尊なる歟海尊は平泉没落以前に遁れて山中に入り仙人となりしといひ傳へり

たまたま目に止ったこの例からしても、清悦こと海尊は文治五年から数えて実に五百三十余年、寛永七年に至るまで東北の村々を歩き廻った。そして古き合戦の様を伝えたというのである。それにつけても常陸坊海尊は何故に流浪、落脚の身を長らく人々の前に晒し、老残、頽齢の後、ようやく門崎の地に留まったのであろうか。

考えられるのはまず、必ずや彼をしてほとんど許し難いとする心情が蟠って、いつまでも人々の中に潜在したであろうということである。すなわち、ひとたびここに強く印象づけられるのは、はなはだしい高齢に達しながら、それでいて依然安住の地を保証されぬ受苦の人、常陸坊海尊の姿そのものであった。繰返すようになるが、『義経記』『義経物語』に拠る限り、かの海尊は最も大事な場面にあって俄かに姿を晦ましてしまった人物であった。そうした行動に走った人々であった。そして後刻、雪深いみちのくの村々をさすらい歩くのは、いずれ過去における己が所業とは決して無縁ではなかった筈である。少くとも、仮りに『義経記』の延長線上で海尊その人の来歴と消息を問題にするならば、一人の読み手としての私はそのような解釈と認識に達する。

しかるに、こうした長寿、高齢の海尊、ならびに清悦に対しては、その拠って来たった原因を説くのに、これとはまったく異った伝承があった。結論をさきに言えば、海尊は得体の知れぬ妙な物を口にしたが故、それで大層な寿命を得たとする話がそうである。そしてこの場合もまた、主人公は常陸坊海尊といい、あるときには清

悦ともいって定まるところがなかった。そこでしばらくは『義経記』にいう消息とはまったく別のこの種の伝承を取り上げてみたい。

二

ところで、この話は土地の人々の間には頻りに用いられていたらしい。そうでなければよそ人の耳にはとても届く筈がない。菅江真澄はそれをちゃんと筆にしていたからである。たとえば『未刊菅江真澄遊覧記』は、天明六年三月八日の一節に次のようにいう。

此きみ都を出給ふときは、義経を義行と書かへ、みちのくにては、義顕となのりて、一条今出川の、久我殿の御姫みやを具してこゝに住給ひし、又河越太郎が娘を具し給うとも、大納言時忠卿の御娘をぐし給ふとも、まちまちにいへり。ほろび給ふのとき、御女子に、しぬべきをやういひ送り給ひて、身まかり給ふと聞給ひて、かたなにつらぬいて、いき絶給ひしかば、海尊と清悦と、はからひて、此館に火をかけて焼たりといふ。此の清悦といふは、あやしき人にあひて、にんかんという魚をくひて、五百歳のことぶきをたもちたりといふ。三人たうひしといふ、いまひとりは、ひたち坊ならんか。このこと清悦物語といふものに見へたり。義経の雑色に、喜三太清悦（キヨエツ）といふものありしが、老て法師となりて、清悦といひたるにやあらん。ある人のものがたりに、にんかんというは鮭の腹のなかにある、人の形に似たるもの、たまさかにあることあれど、とり捨るなどいへり。

と。そしてこれと同じ内容を説く記事は、他に八月六日の一節にもあった。

葛西城の址を、ゆん手に見つゝ、小川ひとつこえて川崎といふ処に行て、清悦の墳たづぬれば、「斎藤なにがしといふ人の軒ちかく白檀の生ひしけりし下也」とおしへたり。かくて、其ところに至れば、ある人、あないして、「この清悦坊は、義経につきそひ奉りてよりあやしのいろくすをくひて、いのちながらへて、寛永七年の夏まで世にありて、こゝにいたりて身まかりて侍るよしを伝へ聞て侍る。

又こと処にも、清悦の塚あれど、いつはりにてやはんべらん」といひて別たり。

これがそうである。

右の記事はおそらく『東磐井郡誌』所収の事例に重なるのであろう。これからしても明らかのように菅江真澄の筆によれば、海尊ならびに清悦長生きの原因はひとえに「にんかんといふ魚」を喰ったとするところにあった。なお繰返すようになるが、ここでは最早『義経記』や『義経物語』に取沙汰された内容の消長にはまったく関係なく、事実その日の両人は武蔵坊に負けず劣らず最後の最後まで修羅場に踏み留まり、その上で「此館に火をかけて焼たり」と伝えるのであった。このようにして、常陸坊、清悦の長寿にはすでに及んで、別条たしかな原因があった。具体的にはこれを説いて「にんかんといふ魚をくひて」であるといったのである。しかも真澄は、この伝承の事情を述べて「このこと清悦物語といふものに見へり」と明記していた。参考までに『清悦物語』のその部分を閲してみよう。場面は六月上旬のある日、清悦が二人の者を伴って衣川に

釣に行く。たまたま一人の山伏に出会い、その案内を受けるところである。

彼山伏と同道○山伏に打連三人の者共山中迄○者共同道仕山中はるばる通り行く。見れば大きなる屋形あり、則入見れば金銀をちりばめ心言も不レ及次第也。休居て障子のすきまより料理するを○ゆるゆる居料理するを障子の透間より見れば彼山伏一人にて、かはもなき魚の色は○見るに山臥壹人にて唯も無レ之朱の如くなるを料理して其肴を膳にすへ出す、飯は○如二朱之一成物を料理する湯漬なり、その肴殊の外赤くをそろしき躰也、残其肴皿にて食○おそろしければ二人は喰ず○不レ食此清悦計り食する也、其味世に類なきむまき物也○食するなり世にた清悦宣ふは○申柱此肴の名は何と申ぞと問、山伏答て云く○何と申と此魚をばにんかんと云ふ。兎角○人魚と申物成と山伏に向ふする語ければとがふ申に日も暮方に成間、三人の者御馳走忝しと○三人之者共御馳走難レ有と申暇乞して高館へ歸る。貳人の内一人は彼肴を懐中して家中○家内の者の娘に爲レ喰しが、其娘○其故彼の娘か天正十年の秋迄長命して平泉に居すると清悦語也、某も○清悦物語に申也、清悦も其肴食する故が如レ是長命すと語りき○長命なる哉と物語に御座候

こうしてみると、『清悦物語』に記される内容はやはり世にも不思議な物語であった。そして、清悦自身が竟に長寿を得るに至った事情をまことたしかに述べている。就中「かはもなき魚の色は朱の如くなるを料理して」といった一節などは、妙に生ま生ましい実感を伴って印象される場面であった。加えて、いまひとつ注意すべきはそこでの結末である。「貳人の内一人は彼肴を懐中して家中の者の娘に爲レ喰しが、其娘天正十年の秋迄長命して平泉に居する」とする一条である。これによると「にんかん」という魚を食したのは二人であった。つまり清悦に同道した仲間の一人が秘かに「にんかん」を持ち帰り、家にいた娘がそれを食べた。そこで彼女は天正十年の秋まで長生きをした。他の一人はいうまでもなく、当の清悦であったとするのである。

もっとも、こうした説明は他にもあった。たとえば小野寺謙の『東藩野乗』は、「清悦翁傳」にその条を次のように記していた。

文治三年廷尉事敗而東下。主二藤原秀衡一。居二于高館一余亦従焉。其年六月余拉二従者二人一。釣二于衣川一行入二達谷一。有二一老人一相對而釣。既而曰我居不二甚遠一。子盍二来話一。即随到二其廬一。造構華潔。都非二塵世所一有。老人自執レ炊研レ肉供二晩餐一。其肉如レ朱食レ之甚美。問二之老人一曰。為二仁薬一日且暮拜而還。後再訪竟不知二其所一也。自レ是身體輕健無レ疾無レ老。不レ覺至二于今一。蓋偶然耳。時従者異二其肉一而不レ食。一人携歸與二之一女子一。其女食レ之亦不レ死。至二天正十年一不レ知レ所終也。

『東藩野乗』の一文は、元来が『清悦物語』にもとづいて成ったかと察する。しかし「後再訪竟不知其所也」はともかくも、さらに「自是身體輕健無疾無老。不覺于至今」とする部分は、理想的な健勝長寿への思い入れがはなはだしく、その意味でこれについてはすでに独自の見解に達していたといえよう。それはともかくも、おおよその筋書きはまず『清悦物語』に変わるところはない。問題の食

物について、こちらはこれを「仁羹」とした。「其肉如朱」とするのも同じい。わけても「時從者異其肉而不食。一人携歸與之一女子。其女食之亦不死。至天正十年不知所終也」の一節は、まさしくさきに言った伝承をそのまま踏襲するところであった。簡単には見逃し難い内容である。

三

そればかりではない。これらにほぼ匹敵する話はかなり早くから他の地域にも行われていた。もっとも、そのすべてが必ずしもきちんと対応するわけではない。しかし、次の事例は如何であろうか。『新編会津風土記』巻之五十五、「陸奥国耶麻郡之五」所収の資料である。

金川寺　境内東西三十一間　南北十五間年貢地　村中西頰にあり、松峯山と號す、曹洞宗會津郡南青木組北青木村憲倫寺の末山なり、開基の年代詳ならず、昔若狭國小濱より一人の老比丘尼來りて勝地を相し、この村の地頭石井丹波守に請て一宇を建立す、地名に因て金川寺と號せりみづから彌陀の靈像を刻て本尊とす、長二尺六寸あり住職年を經て八百歳の齢を保てり、因て世にこれを八百比丘尼と云、別に法諱ある事を知るものなし、又此寺の前に鶴淵と云淵あり、其側に大なる奇石二つ並べり、其形狀奔馬に似たり因て歌あり、

詠人不知

會津山麓の里の阿彌陀堂霞かくれの鶴淵の駒

縁起の載する所斯の如し、此寺昔は村の辰巳の方十町餘を隔て堂島川の南にあり天正巳丑の亂に兵燹に罹て後此地に移せりとぞ今猶礎石あり此所の前に淵あり即ち鶴淵なり　又俗説に此八百比丘尼は秦勝道が女なり、勝道は秦川勝が孫にて朝に仕て諫諍し讒者のために放逐せられ、和銅元年此地に來り會津山の麓に謫居す、里長の女に相馴れて養老二年正月元日に此比丘尼を生めり、勝道かねて庚申を尊崇し村の父老を集めて庚申講を營しに、ある日駒形岩の邊鶴淵の底より龍神出て大衆を饗應す、中に九穴の貝あり、人怪て食はず道に棄しを勝道拾て家に歸る、此比丘尼採て食しゆえ壽を保てりと云、此説縁起と異なりいづれも來歴證とすべきなし、

ここでの例は八百比丘尼伝説をいっている。主旨はあくまでも伝説として定着した八百比丘尼の話を述べるにあったと認められる。しかし、具体的に示されるようにこの地での八百比丘尼伝承には二様あった。一つは若狭国小浜を拠点とする汎くに知られた話である。しかるに他にもう一つ、すなわち「俗説に此八百比丘尼は秦勝道が女なり」とするのがあった。『風土記』はこれを「俗説」といっている。「俗説」とはいうまでもなく、もともとこれが土地での口碑、つまりは俚伝、俚譚にあったという事情を訴えるのであろう。それから推せば、要するにこちらの話が先行してその土地に行われていたとする事情を明かしているではなかろうか。そして、この「俗説」こそが、ここでもまたかの「あやしのいろくず」ことば「にんかん」「仁羹」を喰ったとする一連の系譜にあったのである。それをここではただ「九穴の貝」と称しているだけである。それだけではない。いま『新編会津風土記』が明記していた、この「九穴の貝」こそ、実はこれから後、他に及んでさらにこの種の話の素姓を追って行くためのひとつの鍵になっていると考えられるも

のであった。

四

さて、ひとたび記された資料を辿ってみると、このように、東北地方にはこの種の話柄がひとしきり行われていたのが判った。そこでいったん、これらの話の骨子を整理するとそれはおよそ次のような筋になる筈である。

一　水の辺で出会った見知らぬ者の案内を受ける。そこには饗応の準備がある。

二　垣間見ると魚のごときものの料理を用意している。

三　仲間はそれを気味悪がって、誰も喰わない。

四　清悦一人が食べる。大層うまい。

五　料理は「にんかん」だと知らされる。

六　仲間の一人が「にんかん」を家に持ち帰る。娘がそれを食べる。

七　食べた娘は長寿を得る。

ところで、こうした趣旨の話はそもそもがいったい何処から将来されて、それぞれの筆にのぼったのであろうか。菅江真澄の記録が断わっての通り、たとえそれが『清悦物語』にもとづくのであったにしても、また『東藩野乗』の「清悦翁伝」が、溯ればこれもまたおそらくはいずれ規を一にするものにあったにしても、そうだからといって、問題はそれで容易に片付くわけではあるまい。何故ならば、それらに相似た話は距離を置いて会津の地にも伝えられており、しかもこちらはわざわざ断わって「俗説」とした上で記していたからである。したがって、ここに一段と想像を逞しくすれば、一連のこの種の話は、どうやら元来が東北の地一帯に好んで行われており、もしも前出『風土記』のひそみにならってこれを表現するならば、「俗説」として各地にしきりに取沙汰されていたのではなかったのか。そのように推察し得るのであった。

そこでつぎにこれを言う場合、そこでの具体的な基準、あるいは目安は当然、すでにいったん整理を終えたさきの一から七までの話の骨子、もしくはその構成が直接の手懸りになってくる。それに留意しつつ、改めて近辺の状況を捜るに、この話に関しては今日なお類似資料と認められるいくつかの伝承例を見出した。以下、これについて述べたい。

昭和三十八年の夏、岳父近岡富治からそれまでには耳にしたことのない話を聴いた。次の一話である。

〔事例一〕　むかし、あったけど。庚申待しでいる人達の処さ、一人の人が「わたしも庚申待の仲間さ入れでけろ」って来たど。どこの人だっていうこど、あまり判らねだども、まず「無理にもお詣りしたい」って、いうごんだで、混てやったけど。

ほしたれば、そごの家の人は、ちょうど廻り宿で、そごの家の人がいだだべちゃな（いたのでしょうなあ）。そすっど、今度、そごの家では、御馳走出すもんだで、大きな鍋さ、もの煮でたんだど。ほすっと、そごの家の人がちょっと出はった隙に、仲間の人が「いったい、何、御馳走すっか」って、こそっと、その鍋の蓋開げて見たんだと。開げで見たれば、いや、いや、鍋ん中には赤子おぼこ丸煮したもんだど。「いや、いや、これはおっかねもんだ」って、ちょうどその時寝でいだ、さっぎの人一人置いで、仲間の人はみんな逃げてったんだど。

寝でいだ人は、今度、目醒ましてみたれども誰もいね。自分一人なんだど。「まあ、まあ、どうしたこんだか、誰もいね。まず、わしばりだけが食べましょう」って、何だか判らねどもな、何か煮ったものだし、「まず、御馳走さったもんだから」って、一人で食べたんだどは。

ほしてな、その御馳走した人は、お庚申さまで、そごさ、ほの、一人残った人は東方朔っていう人だと。ほして、御馳走さったものはふくつの貝ってもんで、ちょっと見っと、赤子の恰好してるもんだと。ほして、東方朔はそれを喰ったお陰で、長生きして、長生きして、八千年も生きったんだと。それで今でも諺に〝東方朔は八千年〟っていうんだど。どんぺからっこ・ねっけど。

岳父は山形県最上郡金山町平岡の出身である。「庚申のむかし」と題して昔話風に語った。雑誌「芸能」に連載の「どんぺからっこ・ねっけど」の三十九回に私はこれを初めて紹介した。そしてその後、拙篇『笛吹き聟』（昭和四十三年刊）の「最初に語る昔話」の項に位置づけた。

翌年、窪徳忠氏の『庚申信仰の研究――島嶼篇』が刊行された。その「庚申の説話」の中に次の一話が収められた。註記に「山形県最上郡金山町魚清水、紫田三四郎氏談」とある。〔事例一〕とは同一伝承圏内である。

〔事例二〕　東方朔は海岸に住んでいたが、あるとき九人で船にのって海にでたら暴風にあって流された。一同、生命はないものとあきらめていたところ、運よくある島に辿りつくことができた。島に上ると、一軒の茅屋があったので、そこへいって食物を乞うと、でてきた主人はお前たちは日本からきたそうだが、気の毒ながら喰べさせてやるものがないという。そこで、やむなく、何も喰べずにねた。夜中になると主人がきて、腹（食事）仕度ができたから起きて喰べろという。東方朔といまひとりだけはつかれ切っていたので目を覚まさなかったが、他の七人は起きた。実はこの人々はねないで、主人が料理するところをみて、料理が「赤むしおぼこ」（赤ン坊）であることを知っていたので、いくら勧められても喰べる気がしないで喰べなかった。主人は、お前はつねによく庚申を信心しているが、起きて食事をせよといいながら、東方朔を起した。七人は料理が「赤むしおぼこ」だということを教えかねて黙っていたので、東方朔は何もしらずに一口たべた。あまりの美味しさに、かれはたちまち一皿分をすすり込んでしまった。主人は東方朔に向って、お前はいつでもわしに顔を合せてくれるなといったのち、七人のうちのひとりに向って、お前は顔はみたことはないけれども、話はきいたことがあるという。その人は、庚申待はせずに話ばかりにいく人だった。主人はその人にも喰べるように勧めたが、気味悪がってどうしても喰べなかった。主人はまた、この男はねている方がよいのだからねかせておけといって、もうひとりのねている人は起さなかった。この人は、いつも庚申待をするよりねていた方がよいといっていた人だった。こんなわけで、七人は喰べず、ひとりはねていたので、東方朔は結局ひとりで九人分全部喰べてしまった。「赤むしおぼこ」と見えた料理は、実は「フケツ（ふけず――不老）の貝」で、一皿分喰べると一千年生きるという魚であった。だから東方朔は九千年生きたということである。

この例は語り口を忠実に伝えていない点にいささか不満は残る。しかし、元来が目的を異にした資料であるからそれは止むを得ない。内容に遺漏はない筈である。その後、隣接する最上町に語られる話を佐藤義則氏が続けて報じた。ここには『羽前小国昔話集』所収の一話を提示するにとどめたい。

〔事例三〕　トント昔、あったけド。

ある村の人達、庚申山さ登って、お庚申待ずしったけド。お庚申の晩ざ、寝ねで夜っぴて起ぎで居ららんねもんだド。

大火焚えで、大っけ鍋かげで、我ァそれぞれ持って来た物ば、鍋さ打ず込んで煮ながら、昔話コ語りすったけド。

夜も大分廻って、鍋の物も煮だどて、「さアさ、みんな。食うべや、食うべや」みんな、朴の葉っぱなの柏木の葉っぱさなの、盛り分げで食ったけド。

其の内の一人なさ、赤虫（赤ん坊）の丸まま煮だみでら物ア当ったけド。「やアや、これア、大変事らちゃ」どったげんの、お庚申様な物ば残してなんねどて、ほの人ア黙って眼閉ぐって呑み込んだけド。

ほれがら、ほの人ア、なんぼなっても年取んねぐなったけド。ほの人ア「東方朔」って云うなは、ほの事だド。今でも諺さ、「東方朔ざア、八千年ェ」って云うもんだけド。

ほの赤坊みでら物ざア、「九穴の貝」つうもんだけド。

東方朔つう人ア、年取んねぐなってすまって、「あアあ、オラア、おまいり（死亡）して、ゆっくり、永眠り度いちゃ」って、云い云いしたけド。

ドンビン、サンスケ。

山形県最上郡下からは現在までに他に二話同一事例が報告されている。特徴はいずれも庚申講を直接その場面に設定し、その上で主人公に東方朔をいうところにある。しかるに何故そのように説くのか、内在する理由についてはにわかに解き難い。もっともこの傾向は他の土地にも同じように言える。たとえば、秋田県山本郡山本町の場合も然程変らない。次は島田忠一氏の報告である。『昔話―研究と資料』八号に拠った。

〔事例四〕　庚申話の話コてば、何人も居であったべども外れでは―、何人も居ねぐなっては、はれ―、ただ、そえごすら二人コなったあげす。すたけや、一人の人、「おえ（俺）どごも、あの加でぐなんひえ」て、今度、来たわげす。すたけや、「すたら、入ってくなんひえ」て、すて、入ったども、今度、「俺、庚申様だんて、俺の家さ来てくなんひえ」て、言うわげす。すたけゃ「んだが」て、今度、行ったべものなんす、すたば、あの、あど二人今度、（庚申様の家、どごであったんだが、昔どものな、どんだが、行ったけゃ、まず、話だものね―）行ったば今度、まんごが行ったつ、仕末（調理）してなんす。何ぼすたたて、長げすて、何がこひぇたんだら、あの仕末コでぎねわげす。すたけ、一人の人は、ねぶて（ねむい）すて、寝ったわげンすは。すたば一人の人まだ、あの、ねぶぐね人まンだ今度ほれ、「何ひぇだべげぇ」ど思って今度、障子の穴コがら、こうやすて見だば今度、童コみだえだあづ作ひぇたわげす。マナ板さあでがってはー。すたけ今度、「こえだば大変だ」ど思って、おっかねすてはー、逃げだわげンすは、一人の人は―。そうやったば今度ほれ、一人の人、寝って知らねで、まなぐ開だけや、是さ、ごっちを（ごちそう）作ひぇで、その貝焼ぎ上げであるわげす。すたけや、「一人の人

逃げで行ったべ。おっかねすて逃げで行ったべ」て「んだども、それ、おっかねあてね」て、「俺、今、一番の良し料理作ひぇで来た」て、なんす。「俺、庚申様だんてがね、あの、これ、海の人魚だんてがね、この人魚食ぇば何万年て生ぎる」たがなんす。そう生ぎらぁたわげだは、庚申様の食べらあづ、そうやぁーたわげンすは。すて、今度、海の人魚てば、尻尾、あの、魚だども、頭コ、童コみだえだわげす。そうやすて今度ほれ、貝焼ぎなすて、そのごっつお分げで来てなんす。すて、今度、それでまんつ、あど、どっと行ったぁべすな。

五

すでに述べたように昔話、あるいは伝説風に類話を伝えている土地は他にもまだある。宮城県登米郡がそうである。佐々木徳夫氏『夢買長者』所収「庚申のむかし」が該当する。さらには新潟県下がそうである。具体的な資料は『新潟県の昔話と語り手』（昭和五十四年刊）所収、佐久間惇一氏報「お庚申様のむかし」がこれに当たる。また現在私共が調査を試みている古志郡山古志村では通常、次のように説いている。

〔事例五〕 オカノエ講で、ヤドの親爺が料理をしている間に講の衆がみな寝てしまった。しばらくして、四人の者が目を覚ますと、ヤドの親爺は人間の赤ちゃんのようなものを切っていたので、気持が悪くなった四人は逃げ帰った。一人遅れて起きた男も、あとから逃げたが、親爺が料理したものを投げつけたのでそれを食べた。料理を食べた男はのちに長生きをした。この料理をクセツノカイという。講の中にオカノエサマがいたのだ。

こうしてみると、話の分布はかなり広まっていたのが判る。東北地方から新潟の地に及んでいたと認めてよい。したがって、心掛けて求めればさらに今後も有力な追認資料は得られるに違いない。一方、伝承圏の拡張に伴ってそれぞれの話の内容にいくらかの振幅がみられる。これは当然の結果であろう。ただし、すでに抽出し終えた基本的な構成を逸脱していることはまず無い。同時に如上の資料はいずれも「ふくつの貝」「フケツ（ふけず―不老）の貝」「くけづのかえ」そして「クセツノカイ」に言及しており、これからしてもまた、紛れもなく同一主題を指向していたと認められる。

かくして、いささか迂遠な道を辿ってきたが、いみじくも『新編会津風土記』が「俗説」と言い置いたその「俗説」こそが、まこと汎い地域にわたってひとつ伝承を踏襲、保持していた事実が窺えたかのようである。そこで、翻って私はかの不思議の「にんかん」とか「仁薬」あるいは「人形」を喰ったが故に思い懸けない長寿を得たとする海尊、清悦の話には、必ずや土着のこの種の伝承が与って働いていたものと想察する。もっとも、それがいついかなる契機を経て文芸化され、遂に海尊、清悦伝にまで昇華して行ったのか。一方「俗説」の伝承例は何故深く庚申信仰にかかわり、また東方朔を言挙げするのか。またそれは八百比丘尼伝説とどこで重なってくるものか。これらの問題については、他に場を求めて言及し、考察して行かなければならないと思う。

（のむら　じゅんいち・國學院大学）